

第2回旧上瀬谷通信施設における国際園芸博覧会招致検討委員会	
日時	平成29年7月10日
開催場所	瀬谷区役所 5階大会議室
出席者	池田 典義、岸井 隆幸、坂井 文、坂田 宏、須磨 佳津江、保井 美樹、若松 浩文、涌井 雅之、和田 新也、綱澤 幹夫、脇坂 隆一
欠席者	隈 研吾、福岡 孝則、水谷 初子、三輪 律江、渡辺 真理
開催形態	公開（傍聴人7名）
議事	1 開催意義 2 基本事項等 3 事業展開 4 その他
資料	資料 (1)資料1：委員名簿 (2)資料2：席次表 (3)資料3：第2回委員会資料

## 議事内容

### 1 開催意義について

#### 【事務局】

(資料3 開催意義について説明)

#### 【涌井委員長】

- ・事務局から案を出していただきましたので、印象をそれぞれの委員の方々から承りたいと思っています。
- ・少し気になるのは、資料3のP8からP9に飛んで、確かに社会的課題の視点が書かれていますが、横浜で開催する前に日本で開催することの意義を考えると、日本が課題解決先進国として、国際園芸博を行うことで、どのような世界的な課題に対して解決の方策を見出そうとしているのか、それにどう横浜が対応していこうかという論理と展開が必要ではないでしょうか。
- ・日本再興戦略や観光立国推進基本計画、生物多様性国家戦略では、それらに対する課題解決のための国の政策です。それとは別に、花・緑の立場からどのような課題解決ができるのか、一つあった方が望ましいのではないのでしょうか。たとえば、社会資本に対し、自然は資本財であるという認識もあります。その延長線上にグリーンインフラが出てきています。すなわち環境問題についていえば、「緩和」という方向から「適応」という方向にベクトルを変えていくべきです。逆に言えば、緩和という方向だけにこだわらず、適応戦略を組み合わせることが望ましいです。これは国際的に認知されていることで、今後このような視点が必要ではないでしょうか。
- ・もう一つ、P17あるいはP12にどんな博覧会がされてきたのか、整理されていますが、私はほとんど

ど現場を見てきました。一連の流れからすると、私自身がプロデューサーとして携わっていた愛・地球博では、初めて環境というテーマを博覧会の主要テーマにしました。その次の上海万博では、環境というテーマを踏まえながらも、都市について非常にポジティブな表現をしていて、都市にはありとあらゆる可能性があるという方向を示しました。ミラノ万博では、スローフードが中心になって、非常にローカルの文化を大事にすることが未来の環境を大事にすることを提起していました。ドバイ万博は、既に一昨年前くらいからキャンペーンを繰り広げて、都市そのものをテーマパークとするような都市開発も含めたプレゼンテーションに留意しています。街全体を、人工的な気候制御の中に置いていくというダイナミックな構想を描いています。こうした一連の流れの中で、今回我々はどのような視点で課題解決をしていくのでしょうか。日本らしさの中でどう課題解決していくのかという論点がもう少しあると良いです。

#### 【事務局】

- ・今日はサンプル的にテーマの例をお示ししています。その前に、開催理念という文章が必要で、AIPHやBIEに持ち込むときには、このような背景なり考え方があった上で整理することが必要です。委員長のご指摘通りP8のこのような社会的課題に対して、花・緑や農・食といったものがどう貢献をしていくのか、考え方を今回示さなくてははいけません。
- ・グレイインフラからグリーンインフラへとお話がありましたが、そのようなことも織り込みながら、この会場をどのように見せていくべきか検討が必要です。事業コンセプトを絡めながら、しっかり方向の転換を打ち出していかなければいけないと考えています。テーマのキーワードだけでなく、開催理念に意義を与えるような視点について示唆をいただきたいです。

#### 【池田委員】

- ・先進国はすでに高齢化に向かっており、その中のトップランナーはこの日本です。そういったことから、健康や高齢化対策を入れたらもっと面白くなるのではないのでしょうか。

#### 【涌井委員長】

- ・2か月ほど前に、日本では10年間かけてABS（遺伝資源の公正で衡平な分配の原則についての条約）に批准しました。これは生物多様性条約COP10の中で初めて検討され、今回批准をすることになりました。日本は様々な業界と調整して熟議を重ね、モデル的に内容を深掘して批准に至りました。今回の件はこの博覧会のテーマに関係してくるのではないのでしょうか。

#### 【綱澤室長】

- ・健康や高齢化への対応というのは、大事なテーマです。花や緑には癒しの効果があることが、近年、科学的に証明されてきています。そういった視点で、花や緑を示していくことも大事だと思っています。
- ・横浜は2020年代にはどうなっているのかということもありますが、日本全体としては、人口減少局面に入っています。横浜市では花き産業が盛んで、花や植木を栽培している経営体は300弱あり、10億円くらいの生産額を持っています。花き産業の振興を考えていくときに、インバウンドを含めた輸出という視点が欠かせないと思っています。博覧会という機会は世界最高水準の日本の花や緑を発信していく機会として大切であります。

#### 【和田委員】

- ・地元から期待があると先ほどありましたが、池田委員あるいは地元として瀬谷区の森区長から地元の総意、期待を詳しく教えていただきたいです。

#### 【森区長】

- ・地元として意見はまとまっておりませんが、瀬谷が水・緑が豊かな土地柄なことから、そのような郊外の雰囲気を残しつつ、郊外の活性化を期待している話はよく聞きます。水と緑を残しながらも、人が来て賑う場がこの地域に作られれば良いと思っています。
- ・先駆的にこの国際園芸博覧会が開催されることがすばらしいと思っています。都市インフラについては接收されていたこともあり、全く整備されていません。広大な土地を整備するには膨大な時間と費用が掛かることも地元の方々も重々わかっていらっしゃると思います。着実に一步步進めていくためには、この国際園芸博覧会が起爆剤となると素晴らしいと思っています。

#### 【和田委員】

- ・先ほど涌井委員長がおっしゃっていたようにグローバルから引っ張っていくテーマ性と地元から上がってくるものがどこかでマッチングしなければいけません。1986年頃開催されたりバプールの国際園芸博覧会は目的がはっきりしていて、当時は不況で街が荒れていましたが、国際園芸博覧会を行うことで、雇用の創出を図り、失業対策や街のイメージの払拭をしました。その後ガスの問題でその土地の開発が停滞しましたが、博覧会の開催は地元の問題解決の切り口になるのではないのでしょうか。

#### 【坂井委員】

- ・今、世界レベルとローカルレベルの3層レベルくらいで、どんな課題があるかを挙げて頂きましたが、エネルギーの話があっても良いと思います。それが園芸とどう結びつくのかという課題がありますが、都市に住む人口は増えているので都市をこれからどのように作っていくのかという事に対して園芸を使い、もしくは瀬谷のこのロケーションを使って新しい郊外型の都市づくりを発信できないのでしょうか。
- ・日本レベルで考えた場合、課題が色々洗い出されていますが、日本の技術や資産でどのように対抗していくか考えた際に園芸文化の話があると思います。“愛で方”を出していく方向もあると思います。
- ・土地性をどうやって考えていくかが最後は重要になってきます。土地の特異性を洗い出して、どのような提案を出していくかと、基地だった歴史から“平和”とか、通信基地だったことから“IoT”なども次の世代に結びついていることが未来性にもつながります。P9にある首都圏でも広大な貴重な土地とよく言われていますが、この場所の歴史・文化、そしてこれからどうしていくのかをもっと踏み込んで考えていければいいと思います。

#### 【涌井委員長】

- ・まさにその通りで、日本軍の基地から米軍の基地になり、花や緑の持つ平和のメッセージに着目し、同時に情報通信革命（通信基地）など、土地の履歴もポジティブに評価しながら、博覧会のテーマに結びつけるという指摘だと思います。

#### 【坂田委員】

- ・開催におけるエッセンスあるいはキーワードはこの資料に入っていると思います。これらをどう絞っていくかだと思います。農・園芸と未来都市の融合、環境を踏まえた上での国際園芸都市は今後どうなっていくのかというテーマもあります。また、園芸文化を説明し学習するような形で広げていきたいです。
- ・“水”という切り口もあるのかと思われまます。私も世界各地に行っていて、世界のキーワードになりつつあります。植物だけでなく、人類にも大きなテーマです。このような点もひとつの参考にされたらと思います。

#### 【須磨委員】

- ・こんなに網羅されているとどう具現化していくのか疑問です。何を発信するのかについても、これまでと似たものについては避けなければいけないと思っています。何が横浜らしく、日本らしく発信できるかを考えると、日本が誇れるもののひとつに、植物へのリスペクトや敬意がありません。過去の日本人の愛で方も含めて、植物を暮らしの中うまく活用し、植物とともに共生する「豊かな心」が世界の誇れるものではないのでしょうか。花を中心とした市民活動も盛んです。植物をめぐる人々の息吹をこのような博覧会でツールとして発信できたら良いと思います。この地域のためだけと狭く考えずに、すばらしい博覧会を開催し、その開催地は瀬谷だったというような国際園芸博覧会を開くことが肝心です。

#### 【岸井委員】

- ・資料のP20にある事業コンセプトの方向性ですが、ここはどこの国で開催しても同じだと思います。従ってP19のテーマの表現だと、横浜につながらないです。何を横浜が世界に発信するべきかと言うと、以前にもお話ししましたが、2023年は関東大震災から100年で、関東大震災の時はがれきで山下公園を作り、2024年は港北ニュータウン起工から50年で、その中で生産緑地制度を作りました。横浜は都市づくりの中で、常にどうやって人と緑を携えていくのかを議論してきたのです。2026年をターゲットにした時、都市の縁辺部に新しい土地が返還されるのですから、「次の都市と花、緑、農や食などとの関係」について何かメッセージを出してはどうでしょうか。これから世界的に多くの国が都市化の時代を迎える中で、横浜市として「緑を携えた都市づくり」に関するメッセージを出していくような伝え方が必要ではないでしょうか。P19でいうと、都市との関係がキーワードに入っていないと思いますが、そこを横浜市として発信していけばいいと思います。高齢化社会を含めて、横浜市としてやってきたことを訴えていくことが、次の時代の世界中の都市にも役に立つのではないのでしょうか。200くらいの国のうち40くらいの国では人口が減ります。多数では都市化が進み、先進国では高齢化が進むので、それに対して東京、日本、横浜で何か戦略が出せれば、次の時代の都市と緑、自然、農との関係につながりが描き出せるのではないのでしょうか。

#### 【涌井委員長】

- ・都市という視点が横浜の持ち味ではないかだと思います。市の歴史の中で都市問題の課題を解決してきました。その経緯をリスペクトして、未来の都市構造の課題解決の案を横浜として発信する

考え方があっていいのではないのでしょうか。

- ・アワニー宣言から始まってニューアーバニズム、コンパクトシティという概念が独り歩きしていますが、自然や緑地に対する関心はその傍らにあります。横浜がどういう都市像を未来に対して提案するのか、そういうところも検討していただけたらと思います。

#### 【保井委員】

- ・今岸井先生がおっしゃったことと共通しますが、P12に書かれている開発による未来への期待やポスト冷戦へという時代から現在までの時代認識に関する記述に都市を絡み合わせてみると、こういうことではないかと思えます。ポスト冷戦時代、世界レベルでの経済の競争の中で大都市が発展しましたが、そこでつくられた郊外は大変ステレオタイプなものでした。郊外にはロードサイドの商業施設と家しかない、という、文化をないがしろにした開発も多かったのです。しかし、すでにアメリカではこうしたロードサイド店の閉鎖が相次いでいます。委員長がおっしゃるよう大都市の在り方が転換点にきているという時代認識が共有されてきています。郊外を含めた都市化の次のフェーズを、横浜が日本の中心地で示していくというのが意義のあることではないのでしょうか。郊外で自然と共生し、農を取り入れた暮らしがどう成立して、どう魅力的になるのか、暮らしが続いていく部分と公有地化されて展示していく部分とあると思えますので、生業としての産業と暮らしの形が見えると良いと思えます。

#### 【涌井委員長】

- ・私は多摩田園都市や港北ニュータウンのプランニングに関わってきましたが、とりわけ多摩田園都市は、都市と田園の矛盾を変えるスタイルではなく、クオリティの高いステレオタイプの郊外都市であります。これからは本当の意味で郊外の暮らしについてどうあるべきかを考えていく必要があり、大きな問題提起になるのではないのでしょうか。委員の皆様の意見を伺っていますと、意見が交錯して議論がまとまらないのだと思えます。もっとフィジカルな側面で、次の議題である基本事項をお読みいただいて、それに対する質問を入れながら、ここにフィードバックして進めたいと思えます。

## 2 基本事項等、3 事業展開について

#### 【事務局】

(資料3 基本事項等、事業展開について説明)

#### 【和田委員】

- ・想定入場者数ですが1000万人～1500万人とありますが、この数字は国際的には相当大規模な博覧会になると思えます。2000万人を超えた大阪花博は空前絶後で、ヨーロッパでは300万人～400万人の規模が目安になっています。入場者数にこだわるのではなく、滞在時間を長くすることや体験型の設営にすることで1000万人の動員が難しければ、入場者数はあまりこだわらなくても良いのではないのでしょうか。
- ・サテライト会場を設けるのも賛成ですがAIPHとしてはサテライト会場を認めていません。ただ、やってはいけないわけではなくコア会場がしっかりと要件を満たしており、まわりの会場は盛り

上げのためにやっているという形式が取れば大丈夫です。

- ・面積については規模が大きすぎることで来場者がどのように周回するのか、最近のAIPHの議論に挙がっています。

**【涌井委員長】**

- ・これまでの博覧会の中には、一般博の中に特別博を仕込むような2段階方式のような博覧会もあったかと思います。今回検討しているのは開催期間すべてをAIPHの承認を受けた園芸博覧会を招致することで良いでしょうか。

**【事務局】**

- ・全期間をAIPHの認証を取ったうえでBIEへ登録する形を検討しています。ただし、全体の会場の形式や会場の取り合いなどによっては、2段階方式で開催することについて事務局としてこだわりはありません。

**【和田委員】**

- ・AIPH内部でも日本に対する信頼は高いので、理屈が整っていれば柔軟な対応は可能と思われます。

**【事務局】**

- ・P30の会場展開のイメージの中で和田委員からご指摘がありました。事務局がコア会場やサブコア会場と言っている概念は、1つは先日閉幕した全国都市緑化よこはまフェアを念頭に置いています。都心臨海部の会場として山下公園や日本大通りなどと、郊外部として里山ガーデンの2つをコア会場としています。その他にサテライト会場として市内18区連携として各区のイベント時や商店街などで花を飾ってもらうなどの展開をさせて頂きました。併せてパートナー会場として三溪園や八景島も盛り上げに参加しています。これらの実績から、上瀬谷のコア会場を中心として「わがまち博覧会・わが家博覧会」を行ってもらうことを提案させていただいています。
- ・コア会場だけで博覧会を完結させるのではなく、バーチャルも含めて色々な場所で波及させていきたいという思いから、会場展開についてはコア会場を大事にした上でそれだけではない色々な方法を使っていきたいです。既存の文化施設や三溪園といった庭園も一緒に海外の方にもお示ししたいという思いから、広がりのある会場イメージを提案させていただいています。

**【涌井委員長】**

- ・AIPHやBIEに対する申請の考え方とコンセプトから来る会場の考え方の2つを分けて考えていかないと、下手をすると中心が粗雑になってしまう恐れがあると思います。戦略的には2重の構造になっているという認識で良いでしょうか。

**【事務局】**

- ・現状では2重構造になっていると考えていただいて構いません。コアの部分のAIPHやBIEに申請する部分についてはしっかりしたものを用意していきますが、新しい博覧会のスタイルを示していくには国内的には前述した考え方でご理解頂けるとありがたいです。

**【和田委員】**

- ・このようなコア会場だけでなく、広域が活性化する博覧会の例ができれば規約を改正する動きも出て来るかもしれません。是非チャレンジして頂きたいです。

#### 【坂井委員】

- ・会場展開イメージでコア会場だけでなく他の会場を使って開催するのは良いと思います。先日行われた全国都市緑化よこはまフェアでは、都市型の園芸文化と里山での園芸という2つの会場でどんなチャレンジをしているのかが興味深く、今回の博覧会で「都市と緑」という大きなコンセプトにした場合、それが都心臨海部のような成熟した都市の中で開催するとどうなるのか、また上瀬谷のような郊外部で開催するとどうなるのかなど、会場で違いを出していかないと集客には結びつきません。
- ・「市民」という観点は興味深いです。市民の緑化に対する意識が高まるよう、博覧会が起爆剤となるような位置づけにすれば面白いと思います。
- ・人数に関して質問ですが、これまで行われた博覧会の中で外国人と日本人の来場者の割合はどのようなものでしょうか。

#### 【事務局】

- ・手元にデータがありませんので、調べて回答させていただきたいと思います。

#### 【坂井委員】

- ・外国人の来場者の見込みをある程度は検討に入れる必要があると思います。ヨーロッパとアジアでは嗜好が違いますし、インバウンドについても目標に掲げていることから、そのような点も考えながら検討出来ればと思います。

#### 【須磨委員】

- ・来場者で盛り上がるかどうか、重要なポイントの1つに、アクセスの問題があります。計画に書き込んでいくべきかはわかりませんが、実際に採択された場合に、アクセスに関する対策・検討が必要になってくると思います。

#### 【事務局】

- ・開催申請をする際には、関連公共事業という形になりますが輸送手段等の計画書は作成します。今回は国際園芸博覧会ですので、最終的には政府が計画立案をすることになることから、政府と調整を図りながら検討を進めていきます。また、この博覧会は上瀬谷の活性化拠点としての起爆剤の役割を持っていますので、博覧会後の土地利用がどのようになるのかを見据えて輸送機関や上下水道のインフラなどを検討しなくてはなりません。その点については博覧会の検討と並行して進めていきます。全体的な輸送力は入場者数と関係しますので、年度末の答申をまとめる際までには調整をしていきます。

#### 【涌井委員長】

- ・第1回の委員会の際に基本的な交通ネットワークの概念は示して頂きましたが、来場者が300万人なのか、1500万人なのかの想定によってはアクセスの条件が全く変わってきます。須磨委員のご指摘のように密接不可分であると思います。あるいはパーク&ライドなのか、ダイレクトに考えていくのか、首都圏の将来交通計画の一連の流れの中で何らかのジャンクションを考えていくのかなど、様々な検討が必要になってくると思います。資料の中にも何回も繰り返し出して構わないので示していただけるとありがたいです。

#### 【岸井委員】

- ・ 博覧会の最終的な目標は土地利用をどうしていくのかになるので、オリンピックなどでもレガシーと言われていますが、次に何を残していくかを十分に考えていく必要があると思います。
- ・ 植物はその場ですぐに展示できるものではないので育成などの準備が必要になってくると思いますが、180日間の開催期間はコアなショールームとしての期間ではありますが実際には2~3年前から準備がありますし、さらには開催後のフォローアップとしての期間もあるので合計で5~6年の期間になります。市民の方々にとっても様々な活動をしている中で、世界中の人たちにプレゼンテーションができる場としてコア会場があると良いと思います。多くの方がNP0の活動をしているとの事ですので、新しい郊外のあり方をどう提案するのも非常に重要であると思います。郊外部における都市と農の関わり方をどのように私たちが描いてゆくの、そのために5年くらいの期間があって、博覧会会期のショールーム半年があるという戦略的な検討をして頂けるとより深まるのではないのでしょうか。

#### 【涌井委員長】

- ・ 一般的に博覧会はある土地利用の目的の達成のための1つのレバレッジ効果を狙うという事が開催意義の戦略として挙げられています。博覧会を開催して終わりではなく、横浜市のみならず、首都圏としても広大な平坦地が返還されるにあたってどのような影響を与えるのか。土地利用の将来像は重要であり、博覧会との関係は非常に微妙になっています。地元の方々の意見や地域事情を踏まえた検討も進んでいるかと思えます。その点について基本的な構造を事務局から説明して頂けないでしょうか。

#### 【事務局】

- ・ 今回検討している242haの上瀬谷通信施設は2015年に返還されました。つまり2025年は返還10周年の節目の年になります。本市では郊外部の活性化拠点にすべく土地利用を図って行こうとしています。土地利用については昨年から地権者の皆様との話し合いを進めている段階です。また、瀬谷区と旭区の2つの行政区をまたいでいることや、周辺住民の方や当該地区にお住まいの方もいることから、そのような方々にどう説明をしていくのかを検討しています。具体的には瀬谷区民の方、旭区民の方、さらには横浜市民の皆様にご示していくのかという大きな流れがありますが、現在は地権者の皆様にまずは注力している状況です。
- ・ そのような中でインフラが整備されていないことや長い接收期間の中で土地利用を考えられてこられなかった背景があるので、横浜市としては郊外部の活性化拠点として発展させていく1つの起爆剤として国際園芸博覧会の招致を求めています。
- ・ インフラを整備するには莫大な資金がかかりますし、土地利用も242haと広大で時間もかかるので、発展を加速させるためには国の支援を求めるとことや新たな事業手法を作っていくぐらいの事をしないとなかなか進みません。また、上瀬谷のネームバリューを上げていくためにも郊外部の新しい暮らしの提案や地域に住んでいる人たちがどういうまちにしていくのかを日本だけでなく、世界に発信していこうとしています。今後の土地利用と大きな関係性があり、博覧会のインフラ整備にも全て繋がっていることなので、事務局としては地元の状況を織り交ぜながら本委員



会でも説明していければと思います。ただ、博覧会のスケジュールについては地権者の方々のご理解が必要です。その他、農業と土地利用を図っていくための事業手法が必要になるので、環境アセスメントや都市計画決定、農業振興地域・農用地区域の手続きなどの整理が課題になってくると思います。

#### 【岸井委員】

- ・そのようなことを委員が理解するためにも過去の花博の跡地利用が実際にどのような空間として展開されているかや、花・緑・農などに関連する研究機関や国際機関などがどのような規模でできているかを整理して頂けるとありがたいです。
- ・2026年に開催するならば、MICEとしてこの期間にどういう事を誘致するのも検討して頂けると良いと思います。様々な国際的なイベントが開催されると思われるので、博覧会に弾みをつけるためにも2重3重とイベントが重ならないと世界に発信できないのではないのでしょうか。

#### 【涌井委員長】

- ・博覧会を単に2026年に180日開催するのではなく、レガシーとプロセスも含めて博覧会というひとつの概念の中でとらえていく事が非常に重要ではないのでしょうか。都市の熟成のプロセスの中に新しい市民化、あるいはネイバーフットプランをどうするのかという話が背景にあり、熟成を図っていく能動的な考え方で検討していくべきではないのかという、ポジティブにプロセスを考えていく事が必要なのではないかと、その中にMICEもあるという考え方だと思います。

#### 【若松委員】

- ・規模の話が出ましたが、半年の期間でこの場所で開催するには大変優れている場所であると思います。集客数に関してももちろん方法によりますが、この場所のマーケット規模として1000万人くらいは超えるだろうと思います。アクセス性も現在の鉄道や道路などの状況は良くないですが、方法論としてはさほど難しい場所ではないのではないのでしょうか。この地域は東京や横浜の臨海部のマーケット圏内にありますし、距離的にも負担はないと思われます。大きさも約100haを想定しているとの事で間違った規模ではないかと思えます。
- ・どれくらいの人口、どんな方法論で行うか、マーケティングをもっとしっかり整理するべきです。滞留時間を多くさせるのであれば1人当たりの面積を多く使うことになるので、それだけでは難しいでしょう。例えば毎日5000人のショープログラムを行えばすぐに解決してしまうので、入り方や参加の仕方を分析し始めた方が良いのではないのでしょうか。一律で来場者が見学するというようなプログラムにはしない方が良いのではないのでしょうか。
- ・企業も含めて参加手法も同時に考えていく必要があります。昔の博覧会のようなパビリオンだけの会場だけでは限界なので、ショーに参加したり、大きな実験場を設けて毎週公開実験をするなど、参加手法についても検討を進める必要があります。

#### 【涌井委員長】

- ・愛・地球博は、3月に開催した博覧会でしたが、気温が低く花も萎れてしまったりしたので来場者が少なかったです。4月までの段階で失敗に終わるかと思っていましたが、その後来場者が増え続けました。原因として会場計画の設えは戦略的でしたが、それ以上にボランティアによる参

加が多かったことがあります。「10万人ボランティア」という方法を取り入れ、これによって多くのボランティアが参加してくれました。ボランティアの人たちがリピーターを呼び、中には開催期間中に皆勤で来場してくれる人もいました。このような状況の中で想定入場者数を延べ人数とすることが望ましいのかも今後検討していく必要があるので、先日の全国都市緑化よこはまフェアについてもリピーターは多かったのかどうか、教えて頂きたいです。

- ・若松委員の意見を聞くと、下手をすると質が悪くても場所や立地が良いから多くの人が集まることにもなりかねません。マーケティングの考え方のデータを事務局で整えていただきたいです。
- ・事務局サイドで意見を集約して1つのテーマ設定や理念を作っていくのはかなり難しいと思っています。何名かの委員で集まってテーマや理念などを検討し、次回以降に効率よく有意義な議論ができるように準備をしたいと思いますがいかがでしょうか。

**【出席委員】**

- ・了承

**【事務局】**

- ・そのような形を取って頂けるのであれば事務局として付いていきたいと思っています。

**【涌井委員長】**

- ・今日の委員会は花や緑について検討するのは勿論ですが、AIPHの概念を見てみると非常に幅が広いです。別の見方をすれば生命圏とも読み取れます。国際的な訴求力がどれだけあるかと、横浜だから開催する意味を考えていきたいです。
- ・ところで、博覧会の開催に際して横浜市は10か国以上集められるのでしょうか。

**【事務局】**

- ・本市は国際都市を標榜しています。姉妹都市の他にも共同宣言都市やY-PORT事業としてアジア諸国と交流がありますので、10か国以上の参加は可能と考えています。

**【涌井委員長】**

- ・日本は国際園芸博覧会が行われるたびに、政府出展を重ねてきました。日本で開催することになると他の国に出展してもらうことになりませんが、国ではその点についてどうお考えでしょうか。

**【脇坂対策官】**

- ・これまで政府出展については農林水産省とともに行ってきました。政府が他国の博覧会に出展する理由に、日本で開催した時に他の国々が出展してくれたから、ということもありますので、横浜で開催された場合は多くの国に参加してもらいたいと考えています。

**【綱澤室長】**

- ・日本は魅力がある国だと思いますので、他国からの出展は多くあるのではないのでしょうか。

**【和田委員】**

- ・過去の国際園芸博覧会を様々見てきましたが、国際出展の展示がしっかりしたものとそうでないものがあります。全体の2割か3割が国際展示となりますので、是非テーマに沿った展示をしていただくように各国と調整頂ければ、来場者が満足できる博覧会になると思います。

**【事務局】**

- ・観光MICEとして華やかな部分も大切ですが、横浜市は全国の自治体の中でも多くの外国人が居住していますし来街者も多いです。そのような意味では外国の方の生活や文化、お気持ちなどを様々なイベントで気にかけてきています。2020年オリンピック・パラリンピックや、2019年にはラグビーワールドカップでは決勝戦が行われます。その他トライアスロンの世界大会も8回行われています。そのような中で様々な国の言葉話せる市民もいますし、展示だけでなく博覧会に来場される方を含めて岸井委員が言ったような「準備」をしていきたいです。
- ・本市は3年前に自治体で唯一、国際局を作りました。その点でも国際化に力を入れていきますし実績やビジョンもあります。

**【涌井委員長】**

- ・大型客船バースはいつごろ完成する予定でしょうか。

**【事務局】**

- ・クイーンメリー号やクイーンエリザベス号のような大型客船が入港できる港が2019年に完成する予定です。またその年にはクイーンエリザベス号が横浜を発着するツアーも初めて組まれることになりました。博覧会の開催が決まればあらゆる手段を活用しながらPRをしていきたいと考えています。

**【若松委員】**

- ・園芸界の方々に要望があります。このような博覧会などのイベントや開発計画が立てられている時にランドスケープの分野はいつも最後に扱われているような気がしています。花博やグリーンインフラを活用した開発を行うのであれば、ランドスケープは先頭に立って進めていく方法論もあるのではないのでしょうか。それに付随する形で商業のあり方などを考えていく逆転のプロジェクトマネジメントの手法を実践するのも良いのではないのでしょうか。

**【和田委員】**

- ・造園業協会としても主張し続けてきましたが、実態としては後手に回ってしまう現状があります。造園界としても是非とも先頭に立って進めていきたいと思えます。

**【岸井委員】**

- ・国際園芸博覧会は横浜市だけでできるものではありません。今回この会の委員は日本人ですが、企業側からの意見や国際的な視点から彼らが何を博覧会に望んでいるのかをヒアリングをしてアイデアを貰うことも開かれた博覧会を目指すには必要ではないのでしょうか。

**【涌井委員長】**

- ・今のご指摘は非常に大切に、マサチューセッツ工科大学では、これからの未来は情報とバイオが重要になってくると言っています。そのような面ではこれからの世界は生きものをどのように取り扱っていくのが新しい産業の中で非常に重要な側面で、この2点がこれからの成長産業の伸びしろであると言われています。自分の心の内側に取り入れていくホーティカルチャーも大事ですし、一方言えば新しい産業の出会いのなかでこのような成長産業が動いていく可能性もあります。

#### 【岸井委員】

- ・それぞれがこの時代に何を示したいのか、博覧会の開催までに彼らが何を示してくれるのか、様々な思いが彼らにはあると思います。また、博覧会の開催はこれから10年後ですから、とりわけ情報社会は今想定していることとは遥かに違うことが起きている可能性もあるので、多様なアイデアを柔軟に受け止めることが良いのではないのでしょうか。今までのような会場だけの博覧会だけでは収まらないような気がします。

#### 【涌井委員長】

- ・先ほど健康の話が出ましたが、肉体的な健康だけでなく精神的な健康といったストレスマネジメントをどのようにしていくかが話題になっています。その中に花や緑が極めて大きな貢献があるという事を念頭に入れておいてほしいと思います。
- ・P16の科学技術の中でICT園芸、バイオミクリー、アグリドローンといった言葉が挙げられていますが、土壌汚染の観点から言えば、植物を活用したファイトレメディエーションの研究はかなり進んでいるので、この観点は絶対入れてほしいと思います。

#### 【坂田委員】

- ・開催期間が4月～9月という事ですが、花の植え替えも含め、この時期に開催するとなると相当な覚悟が必要になるかと思えます。大阪花博の時は花を維持するために大変な努力があったそうです。花のバックアップを用意していくことが大前提になってきます。

#### 【池田委員】

- ・上瀬谷にはこれだけ大きな土地が米軍に接収されていたことで残っていました。例えば公園として残していくとしてもお金がかかると思えます。博覧会を開催することのコモダチズムを活用してレガシーとしてセントラルパークのような公園を残せていけたらと思えます。そのためにはどのような方法で土地のゾーンを分けていくのかという検討も必要なのではないのでしょうか。

#### 【事務局】

- ・次回の委員会は8月24日（月）14時から16時、関内周辺での開催を予定しています。
- ・長い間のご議論ありがとうございました。以上で、第2回旧上瀬谷通信施設における国際園芸博覧会招致検討委員会を終了します。